

児童の生活技術に関する研究(第2報)

—子どもの洗濯技能と親の意識の関連—

天木 桂子*・池田 揚子*

(1992年12月11日受理)

Keiko AMAKI and Yoko IKEDA

A Study on Living Techniques of Children (Part 2)

—The Relation between Washing Skill of Children and Consciousness
of Their Parents—

子どもの生活技術を探るために、特に洗濯のしかたを取り上げてその実態を調査した。本報は、小学4, 5, 6年生30名に対して行った前報¹⁾の洗濯技能調査をもとに、その一年後の実態を同一対象者、同一内容で再び調査した結果である。

今回小学5, 6, 中学1年生となった被験者30名を対象に、日常の洗濯経験の有無や洗濯に対する知識を聞くとともに、実際に洗濯を行わせてその様子を観察記録し、一年前と比較した。さらに、被験者の親に対してアンケートを行い、子どもの洗濯行動との関連を検討した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 取り扱い絵表示の意味の理解度(知識)は、1年前に比べて高くなった。
2. 実際の洗濯(技能)では、洗濯物、水、洗剤を計量する者が増加した。手洗いでは、ねじり絞りのみで絞れた者は1/2強に留まり、押し絞りやつかみ絞りを併用したり、ねじり絞りができない者もみられた。洗濯機洗いでは、1年前に比べて望ましい工程で行った者や適切な所要時間だった者が増加した。
3. 子どもが家庭で洗濯を行うことに対して、親の意識は比較的高いが、実際に行っている子どもはそれに比べて少なかった。

〔キーワード〕生活技術、技能、知識・理解、洗濯工程

1. 緒言

近年みられるさまざまな分野での技術革新は、家庭生活にも多大な影響を与えている。そのひとつが家庭の機能の変化である。近代技術は物質的な豊かさと共に、家事労働に対して便利さを与え、時間的ゆとりをもたらした。これによって従来家庭に備わっていたさまざまな教育機能が分化し、それが家庭の外へ移されるようになった。その結果、子どもに教えたり体験させたりする機会や場が失われ、子どもたちの生活能力は著しく低下しつつある。

* 岩手大学教育学部家政科

筆者らは前報¹⁾で、児童の生活技術を探るため、「洗濯」を取り上げてその実態を調査した。すなわち、小学4～6年生30名を対象に日常の洗濯経験や知識を聞くとともに、実際に洗濯をさせてその様子を観察記録し、両者を比較した。その結果、洗濯に対する知識や経験は比較的乏しく、実際の洗濯では、手洗いでねじり絞りがうまくできない者、洗濯機洗いではすすぎを行わない者が観察され、全体として洗濯の技能が十分身につけていないと判断された。

本報では、前報¹⁾をふまえ、同一被験者に対して1年後に追跡調査を行った結果を報告する。すなわち、今回小学5、6年生、中学1年生となった被験者30名に対して、前報¹⁾と同様の洗濯を行わせた様子を観察記録し、1年前と比較した。また、小学6年生と中学1年生は前回の調査から今回にかけて学校で洗濯の単元を学習しており、そこで得られた知識が洗濯行動にどう影響を及ぼしているかも合わせて検討した。さらに、子どもの洗濯行動に影響を与えている要因を探るため、被験者の親に対してアンケートを行い、家庭での洗濯行動・習慣、子どもの洗濯実践に対する意識を調査し、親と子どもの洗濯行動の関連を検討した。

以上の結果をもとに、学校現場におけるより適切な洗濯教材を設定し、子どもの実態をふまえた指導を行うための留意点を明らかにする手がかりとした。なお、ここでいう生活技術には、技術に関する知識理解と技能とを含んでおり、技能とは、その技術が個人の身についた状態となった技術的能力をさす。²⁾

II. 調査方法

1. 対象

対象者は60名(子ども30名、その親30名)である。

子どもは前報¹⁾で調査対象となった者で、うちわけは、岩手大学教育学部附属小学校5、6年生男女各5名、岩手大学教育学部附属中学校1年生男女各5名である。

2. 調査時期

子どもへの聞き取り調査および実際の洗濯・・・1988年11月～12月

親へのアンケート調査・・・1988年9月～10月

3. 調査方法および内容

(1) 子どもへの調査

調査方法、調査内容(観察項目)とも前報¹⁾と同様である。ただし、調査場所に関して、小学生は前回と同様附属小学校家庭科室としたが、中学生のみ附属中学校家庭科室とした。

用いた洗濯物も前回と同様、手洗いはくつ下とし自分のはいている物をその場で脱いで洗わせ、洗濯機洗いは調査者側で用意したジャージの運動着上下とした。

(2) 親へのアンケート調査

質問紙法により行い、子どもの学級担任または家庭科担当教官を通じて配布し、回答を依頼した。回収率は100%である。

質問は、子どもへの観察項目を考慮して以下の25項目を設定した。

- ・家庭での日常の洗濯習慣 (6項目)・・・①洗濯機の種類, ②乾燥機の有無, ③家庭で主に洗濯をする人, ④1週間の洗濯回数, ⑤洗濯を行う時間帯, ⑥洗濯機の設置場所
- ・洗濯機洗いについて (10項目)・・・⑦1回分の洗濯物の決め方, ⑧用いる水の種類, ⑨水量の決め方, ⑩洗剤の品質表示の見方, ⑪洗剤量の決め方, ⑫洗剤, 水, 洗濯物を入れる順序, ⑬洗剤洗いの時間, ⑭すすぎ方法と時間, ⑮脱水時間, ⑯洗剤の使い分けの有無
- ・くつ下の洗い方について (2項目)・・・⑰くつ下の洗い方, ⑱くつ下の干し方
- ・家庭での子どもの洗濯実践状況 (7項目)・・・⑲子どもに洗濯をさせるか, ⑳洗濯方法を教えたことがあるか, ㉑教えた内容, ㉒子どもに洗濯をさせる必要があると考えるか, ㉓実際の洗濯の実践状況, ㉔洗濯に関して親の手伝いをするか, ㉕手伝いの内容

III. 結果および考察

1. 取り扱い絵表示の理解度

図1に、取り扱い絵表示の正答者を2年間を比較して示す。ア～エとも小学校家庭科第6学年の教科書³⁾に登場するものである。

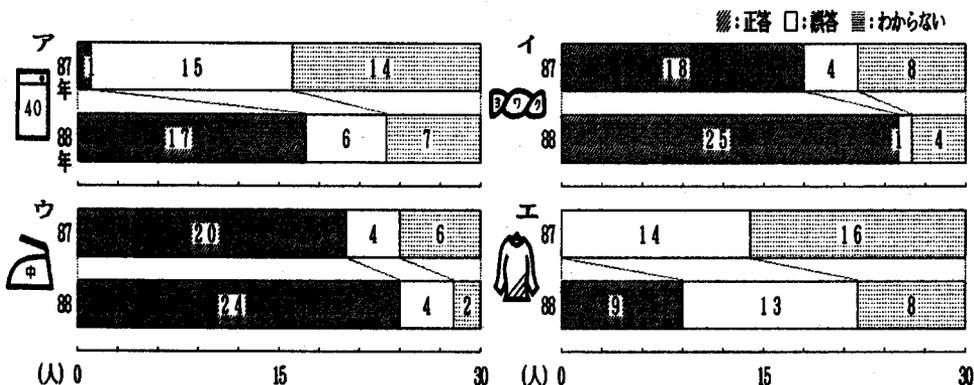


図1 取り扱い絵表示の理解度

前回に比べて今回は、すべての表示で正答者が増加した。正答率が高いのはイとウで、小6と中1は20人全員が正答だった。一方、アとエは前回、今回ともに低く、アの「40」、エの斜線の意味が理解されていない。学年別では、小5の正答者数は前回から今回にかけてほぼ同じか減ったのに対し、小6と中1は大きく伸びた。これは、この学年が学校で洗濯を学習したことが原因だと推察される。男女間は、わずかに女子の正答率が高いものの、大きな差ではなかった。

このような知識・理解に関わるものは、学習によってある程度記憶することができ、意味だけならば正答は得られやすいと考えられる。しかし、実際に着用している衣服にこの表示がついていた場合に、この絵表示通りの取り扱いができるかは別の問題である。家庭科ではこの部分、すなわち知識が技能として身につくことが重要であり、この点まで指導

や評価の対象としなければならない。このことをふまえて、子どもに実際に洗濯を行わせた結果を以下に述べる。

2. 子どもの洗濯のしかた

(1) 洗濯の準備

図2, 3に, 洗濯の準備段階で観察された動作を, それぞれ手洗い, 洗濯機洗いについて示す。手洗いの⑥~⑨は, 固形石けんの使用者15名を対象外とした。

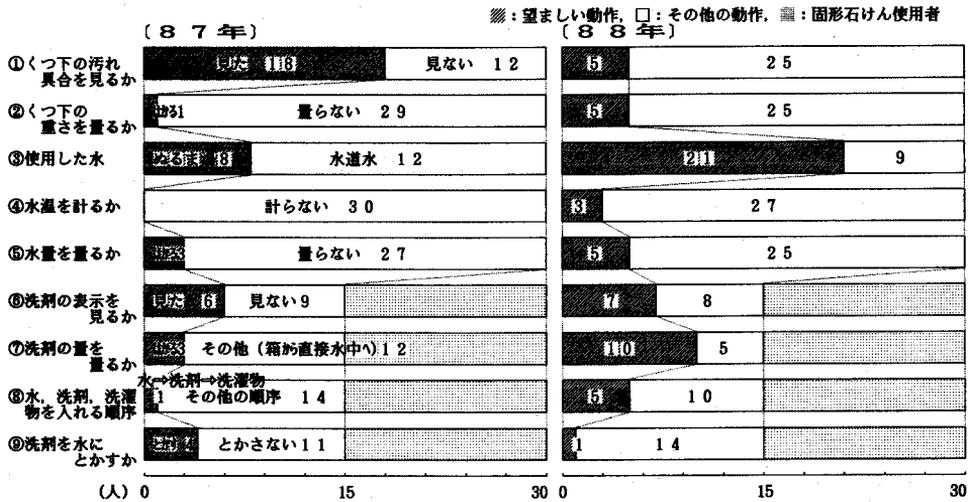


図2 手洗いの仕方 (準備段階)

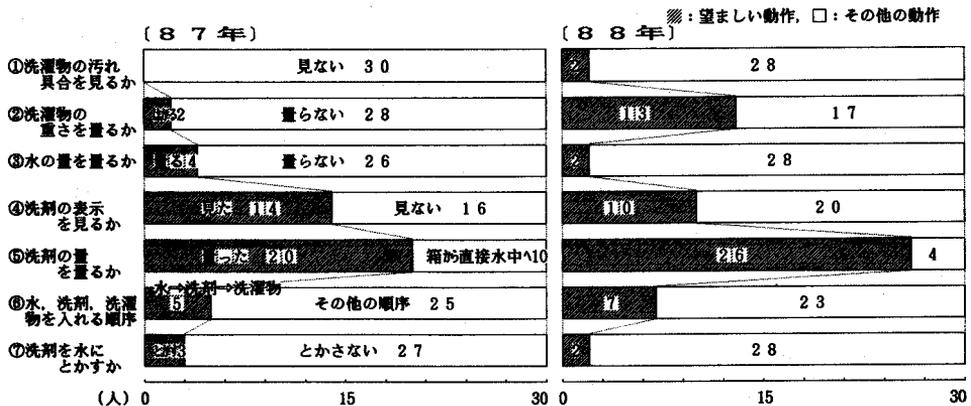


図3 洗濯機洗いの仕方 (準備段階)

手洗い、洗濯機洗いとも前回より望ましい動作が増加した。特に手洗い③でぬるま湯を用いた者が増加しており、洗浄効果を上げる手段としては望ましい傾向である。また、手洗い(②⑦)、洗濯機洗い(②⑤)とも洗濯物や洗剤の量をはかる者が増加し、特に小6の児童に顕著であった。洗濯において計量は基本であり、洗濯物の量から水量が、さらに水量から洗剤量が決定される。現在販売されている家庭用電気洗濯機には、洗濯物の量に合わせて水や洗剤を自動計量する機種もあるが、計量の基本的意味を身につけておくことは大切であろう。なお、洗剤に関しては現在の主流が計量スプーンをついたコンパクト洗剤であることから、一般家庭での計量の習慣は、87~88年当時より確実に広がっていると予想される。

水、洗剤、洗濯物を入れる順序(手洗い⑧、洗濯機洗い⑥)は、今回わずかに増加したものの望ましい順序で入れたのは1/4~1/3と少なかった。これは、最初に洗剤液を調製してから洗濯を始めるという一連の流れとその意味が、前報¹⁾と同様に十分理解されていないと解釈された。これについて家庭で所有する洗濯機との関連を見ると、洗濯機洗いにおいて望ましい順序だった者は、全員二槽式洗濯機であったが、全自動洗濯機を所有する12名のうち望ましい順序だった者はいなかった。全自動洗濯機は、最初に洗濯物を入れるため、洗剤液をつくるという工程はなく、子どもたちの行動に少なからず影響を与えていると判断された。

(2) 洗い、すすぎ、脱水、乾燥の過程

(2)-1 手洗い

図4に、手洗いにおける洗濯から乾燥までの動作を示す。

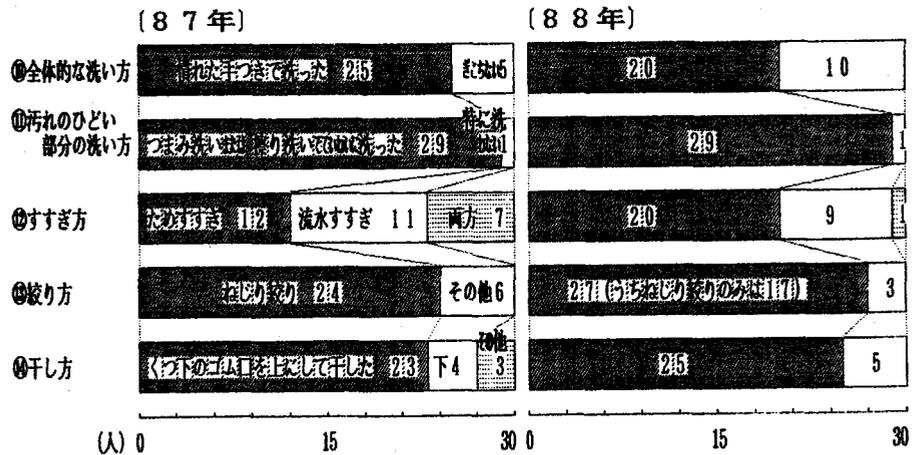


図4 手洗いの仕方(洗い方→すすぎ方→しぼり方→干し方)

①全体的な洗い方では、慣れた手つきだった者が20名と前回の25名より減っており、ぎこちないが1/3の10名にのぼった。これに関しては、判断の明確な基準を定めなかったことと、観察記録者が前回と同一でないため各人の主観が影響したことを考慮しなければならないだろう。

日常の実践との関連では、ぎこちない者10名中6名が、家庭では手洗いをほとんどしな

い、全くしないと答えており、慣れた手つきだった20名中11名がよくする、時々すると答えていることから、手洗いの場合は日常の経験が影響していると判断された。また、学年による差はほとんど見られないが、男女別では、慣れた手つきが女子12名男子8名とやや差がみられた。

⑩汚れのひどい部分は、ほぼ全員がつまみ洗いなどをして落とす努力をしていた。くつ下は子どもにとって身近な衣料であると同時に、大きさも小学生にとって適当である。また、汚れが目立ちやすいため動機づけがしやすく、洗浄効果もはっきりわかるため満足感や成就感が得られやすい。これらの点から、学校の洗濯教材として適切であると判断される。

⑪すすぎは、今回ためすすぎが増加した。ためすすぎは流水すすぎに比べて水が節約でき、教科書²⁾でもこの方法が記載されている。そのためか、ためすすぎをした者は小6、中1に多く学習成果が表れているようであった。また前回は、両方を行った者が7名おり、これはすすぎの2方法が明確に区別できていないため、観察者がどちらか判断に迷う場面もかなりみられた。今回は1名(小5)に減っており、29名はためすすぎと流水すすぎの意味を区別して理解した上で行っていると判断できた。

⑫絞り方は、ねじり絞りが27名と前回に比べてわずかに増加し、望ましい傾向だった。このうちねじり絞りのみで絞ることができたのは17名で、残り10名は押し絞り(くつ下を両手の平にはさみ、そのまま押さえて水をきる方法)や、つかみ絞り(片手でくつ下の上端を持ち、もう片方の手でつかんだり握ったりしながら下に絞っていく方法)を併用していた。これは、ねじり絞りがうまくできないためにとった手段だと判断され、十分に水を絞れず悪戦苦闘している様子が観察された。

今回ねじり絞りをしなかった者は3名(小5-2名、中1-1名)で、いずれも押し絞りまたはつかみ絞りを行っていた。また、前回ねじり絞りができなかった6名のうち、5名が今回できるようになった。ねじり絞りは洗濯技能の一つであると同時に人間の手の技能(Manual Skills)²⁾の一つとしても重要である。しかし、完全にできていたのは約半数だったことから、こうした技能は家庭のみならず学校でも指導して取得させる必要があると判断された。ねじり絞りの技能については、今後詳細に調査、検討する必要があると考えている。

⑬干し方は、くつ下の場合ゴムの脆化防止から早く乾燥させる必要があること、収縮率が履き口よりつま先の方が大きいことからゴム口を上にした方がよい⁴⁾。今回は25名が上にしており、前回との差もわずかだった。

(2)-2 洗濯機洗い

図5、6に、洗濯機洗いにおける動作とその所要時間を個別に表したグラフを、それぞれ男子、女子について示す。図の上段は前回(87年)、下段は今回(88年)の結果である。同時に、親へのアンケートから得られた家庭での洗濯動作と所要時間を、それぞれ対応する子どもの右に示す。

平均所要時間は14.1分で、前回の12.5分より長くなった。男女別では、男子11.5分→13.0分、女子13.5分→15.3分で、男女とも今回の方が長く、また女子に長い傾向が共通してみられた。また、前回は最も短い人で3分、長い人は24分と全所要時間の幅が大きく個人差が目立ったのに対し、今回は、個人差はあるものの全体として前回より平均化していた。

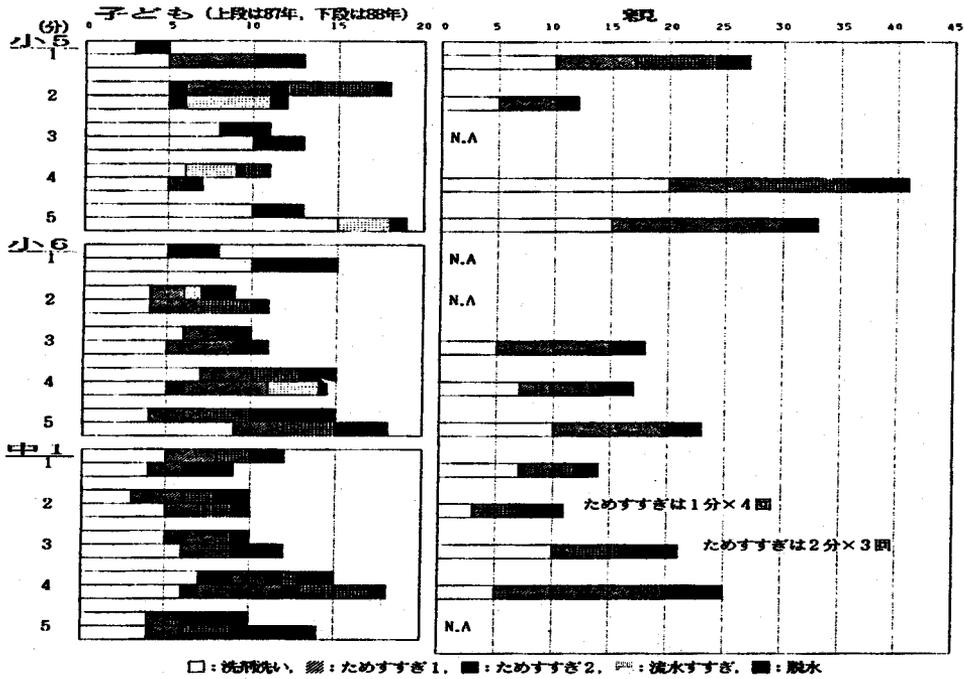


図5 洗濯機洗いの動作と所要時間 (男子)

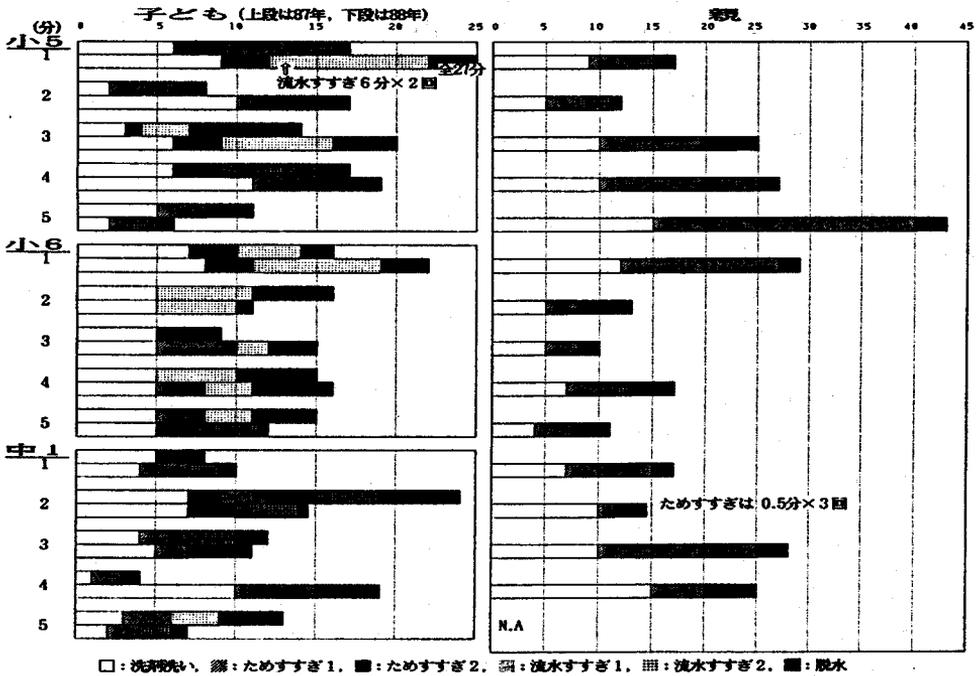


図6 洗濯機洗いの動作と所要時間 (女子)

